

Ⅱ 調査経過

1 概要

奈良盆地の北辺で東西約5Kmにわたって展開する奈良山丘陵は、海拔100m前後の小山塊からなり、洪積世佐保累層に属する。丘陵は東部・中部・西部に区分されている。そのうち西部丘陵は、丘陵を南北に横断する国鉄関西本線から秋篠川に至る地域をふくみ複雑な起伏に開析された地形を呈する。南方に多くの舌状支丘を分岐し、この支丘を利用して5世紀の佐紀盾列古墳群、あるいは8世紀の平城京が形成される。佐紀盾列古墳群の東端に位置するウワナベ古墳は、西部丘陵の東端に相当する支丘の先端を利用して築成したものであり、この古墳の西方にあるコナベ古墳も南方の法華寺境内につらなる支丘を利用したものである。東辺を奈良山中部丘陵の不退寺裏山、北方をウワナベ古墳、西をコナベ古墳から南に延びる支丘で画する一辺約450mの方形を呈する地域は、平城京左京一条三坊に属する街衢に比定されている。そのうち、東三坊大路に推定されている付近では、ウワナベ古墳東外堤の海拔が74.2m、関西本線西側のウワナベ古墳に接する水田の海拔73.1m、推定南一条大路付近の水田では海拔65.8mと北方から南方にかけてゆるやかに傾斜する地形を呈している。平城京廃都後、平安時代のある時期から水田として利用され近世に至るが、現在では奈良市法華寺東町に属し、推定南一条大路上に県道奈良生駒線があり、推定東三坊大路の東側に国鉄関西本線が縦断し、南東隅に奈良市立一条高校がある。近年になって付近の民家は急激に増加し、地貌は大きく変化した。いまや水田のつらなった昔日の面影をたどることはできない。

周辺の地形

1968年から1969年にかけて、奈良市法華寺東町で国道24号線バイパス路線内に分布する遺跡の発掘調査をおこなった。路線内における遺跡には大きくわけて3種類あり、1はウワナベ古墳の東外堤であり、2は推定左京一条三坊内の街衢、3は東三坊大路であった。調査は7次に亘っておこない、発掘総面積は94.6a。調査では、ウワナベ古墳を4PUN、京内を6AFBとよび、両遺跡内をさらに小地区に区分した。調査地区および面積はTab. 1の通りである。

バイパス路線内の遺跡

調査 次数	調 査 地 区	調 査 期 間	発掘面積
54	4PUN-O・P ウワナベ古墳東外堤	1969.2.13~4.3	4.0a
60	4PUN-K・L・M "	1969.10.22~1970.1.13	10.0
55	6AFB-I・J 左京一条三坊十五・十六坪	1969.3.5~5.16	20.0
56	6AFB-F~H "	1969.6.2~10.27・11.12~12.11	32.0
66	6AFB-F・H "	1970.5.7~5.20	2.5
57	6AFB-A~E 東三坊大路（一条通以北）	1969.7.9~12.17	24.6
61	6AFE-H・J・K 東三坊大路（一条通以南）	1969.11.14~12.14	1.5

Tab. 1 調査期間と発掘面積一覧表

ウナベ古墳東外堤 (4PUN-K・L・M・O・P) 4PUNでは

葺石と埴輪

全面発掘によらず、トレンチの設置によって東外堤の旧規模をうかがうことを目的とした。発掘調査によって周濠に面する外堤内斜面に葺石が存在し、外堤に埴輪列がめぐらされていることが明らかになり、旧規模を復原する資料をえた。さらに外堤の外縁に外濠ともいべきものの存在を確認し、それが奈良時代以降の道路として利用されていることも判明した。発掘調査と平行しておこなった分布調査によって北・南外堤における埴輪列をまとめ、全域におよぶ外堤復原の手掛りをえた。分布調査の過程で濠中からえた須恵器片は、埴丘から流出したものと認められ、ウナベ古墳の築造年代を推測するための有力な手掛りになった。

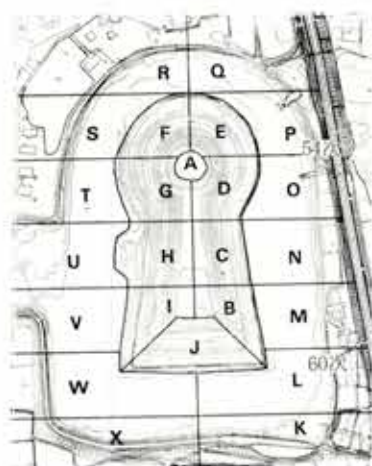


fig. 2 ウナベ古墳地区地図

左京一条三坊十五・十六坪 (6AFB-F~J) 6AFB-F~J地区

邸宅

は、一条高校の北辺からウナベ古墳南外堤に接する南北長約210m、東西幅約30mの地域である。この地域においては、5世紀に築造された2基の古墳を破壊した後に建設された奈良時代から平安時代にかけての建物、溝、柵、井戸などを発見した。奈良時代の遺構は有力貴族の邸宅に比定することが可能であり、比較的保存がよく、平城京建設以後、3回にわたる改修をおこなう。平安時代の遺構は規模を縮小し、後世の耕作によって著しく削平されており、全貌を知ることはできないが、奈良時代の遺構の上に大規模な整地をおこない、以前とは性格を異にする構築物を配置していたようである。

東三坊大路および東側溝 (6AFB-A~E) 東三坊大路の路面とその東側溝を発見した。大路の路面は、後世に掘込まれた幾条もの水路によって攪乱され、かつ耕作などにもなう削平が著しく路面舗装などの状況をうかがう資料はえられなかった。東側溝は奈良末平安時代初期に一大改修をうけ、平安時代初期以後2回の大改修をおこなっていることが判明した。

幹線道路

溝のなかには多数の遺物が包含されており、平安時代初期の標識的な資料となった。さらに告知札などの発見によって、この道路が廃都以後も山城国と大和国を結ぶ幹線道路として活用されていた状況をうかがうことができた。東三坊大路が南一条大路と交叉する部分では東側溝の最終的氾濫によって沼状の状況になっていることから、旧規模を確認することができなかった。同時に、部分的に検出した一条四坊の西限では街衢を画する南北にのびる柵を検出した。ただ、東三坊大路の西側溝については確実に把握することができず、一条四



fig. 3 6AFB区地区地図

坊内の状況についてもいま一つ判然としない状況である。

補足調査(6AFB-H・F地区) バイパス路線敷の発掘終了後、近接した地域の2個所で工事に伴う発掘届による事前調査をおこなった。1は6AFB-H南地区の西方で設定した幅3m、全長が78mのトレンチである。2は6AFB-F西地区の西方で設定した3m四方のトレンチ2個である。両地域にわたる調査では顕著な遺構は検出されなかったが、6AFB-H地区のトレンチで、東方から西方へ下がる地山の状況を把握した。

2 調査日誌

第54次発掘調査 1969年2月13日～4月3日

4PUN-O・P地区

- 2・12～28 発掘準備 草刈り・土嚢積み・排水。
- 3・1 P地区、P₁トレンチ発掘着手。濠と外堤とにわたるトレンチを設定。濠は湧水のため鉄矢板が必要となる。
- 3・5 P地区、P₁トレンチ、濠部を拡張。外堤部、上層に厚い2次堆積土を確認。
- 3・13, 14 P地区、P₁トレンチ、水位が高くなるため、周囲の土嚢を強化。
- 3・17 P地区、P₁トレンチ、外堤部地山面までさげ、外堤が地山削出しであることを知る。
- 3・21 P地区、鉄板搬入。O地区、O₁トレンチ発掘開始。P地区の状況は変わらず。
- 3・23 P地区、P₁トレンチ、濠部で葦石が出始める。上面を落石が覆う。
- 3・25 P地区、Pトレンチ葦石精査。O地区、O₂トレンチ遺構検出完了。
- 3・26 実測。
- 3・27 写真撮影。
- 3・28 補足調査。
- 4・3 埋めもどし完了。

第55次発掘調査 1969年3月5日～5月16日

6AFB-I・J地区

- 3・5 発掘開始。
- 3・7 I南地区、遺構検出。東半部は黄褐色の地山、古墳の基底部か。西半部は整地土。J地区、耕土の排除。
- 3・11 I南地区、床土下の灰褐色砂質土を除去、黄褐色バラス混り土の面で遺構検出。灰褐色砂質土はバラスを含むやや硬い土層で、東部では浅く西南部で厚さを増す。瓦・土器片を含む。J地区、遺構検出。
- 3・13 J地区、床土下に灰色砂層が広がる。SD444の南では、灰色砂層と黄色地山層との間にバラス層があり、道路面をなすか。SD444は2層にわかれる。SB441の柱穴がで始める。
- 3・14 J地区、SB441は3間×2間の東西棟建

物となる。

- 3・15 J地区、東方部では床土の下はバラス混り灰色砂層となり、西方にくらべると1m程度高い面をなす。I南地区、南方から遺構検出。東寄りの部分で木炭層が顕著にあらわれる。
- 3・18 I南地区、西方での土層の堆積が上層から灰色砂層、灰褐色土(遺物多し)、地山の順であることを確認。柱穴出はじめる。
- 3・25 J地区、東方に多数の小柱穴あり。建物にまともらず。
- 3・26 I南地区、東方では、現在の遺構検出面である黄褐色粘質土中に多数の遺物があり、遺構がみあたらないことから整地土層とかんがえられる。黄褐色粘質土を除去し再度遺構検出をおこなう必要あり。J地区、東方で南北溝2条、北西から南東に流れる小溝を検出。いずれも新しい時期のもの。依然として小柱穴が多い。それらの埋土はすべて暗褐色土で検出。
- 3・27 I南地区、発掘区の南寄りで、東西に延びる溝を確認。J地区、東方部の遺構検出おわる。建物としては、SB430、SB437が東西棟4間×2間でまともる。SB437の北側には建物などの遺構がまったくない。
- 3・28 J区、写真撮影。I北地区、床土の排除を開始する。
- 4・7 I南地区 黄褐色粘質土面を精査すると5間×2間東西棟建物(SB470)が出現。南北に廂のつく可能性あり。
- 4・8 I南地区、SB470の南廂を確認。
- 4・10 I南地区、南寄りで土壌ないしは溝とおもわれるもの(後のSD485)を検出。3層にわかれる。第1層は暗褐色砂土、第2層は灰褐色含礫砂土で木炭が混入、第3層は灰色の粗砂。
- 4・11 I南地区、SD485が西方から東方に流れさらに南折する排水溝であることがわかる。南流するあたりは氾濫し遺物多し。「楽毅論」の木簡出現。J地区は実測。
- 4・12 I南地区、SB470の北廂を検出。
- 4・14 I南地区、平塚1号墳の南面の掘の葦石を検出。西向の前方後円墳で、後円部から前方部南面の葦石とかんがえられる。墳丘部分は削平さ

れて遺構なし。I北地区、東方で後円部葺石を確認。その北側は深い窪地となる。J地区、実測を完了する。

4・15 I南地区、古墳前方部確認のため西方に発掘区を拡張。I北地区、葺石北側の窪地の性格をあきらかにするため、トレンチを設定。奈良時代以前の窪地の上に奈良時代の溝(SD453)が東西にのびることがわかる。

4・16 I南地区、SD485の南端部を拡張。

4・18 I南地区、SD485の南折部分をさらに拡張。溝の西岸に柱穴あり(のちにSB476となる)。西方拡張区の遺構、保存状況が悪く判別困難。

4・21 I南地区、SB470よりも層位的に古い柱穴を2穴を検出(SB482)。I北地区、発掘区の北側が高く、窪地が古墳の濠であることがわかる。前方部北側の葺石が出現しはじめる。

4・22 I北地区、古墳濠の窪地でSB455およびSD453を発掘。この状況で実測。

4・24 I南地区、現在検出している奈良時代の遺構に対する写真撮影。

4・25 I北地区、濠を全面的に下げ、葺石を露呈することに専念。I南地区、実測開始。

4・28 I北地区、前方部北斜面の葺石は浮露呈し、後円部の葺石を検出。この付近では水鳥埴輪の破片が多い。I南地区、前方部西方を探索するため発掘区の西方に向う東西方向のトレンチを設定する。

4・30 I南地区、古墳の前方部西方および南西隅を確認。これによって前方部の規模を推定すれば、幅約30m、長さ約21mとなり、帆立貝式の古墳であったことがわかる。南面の葺石の検出にかかる。南濠の整地土層を除いた面で、SD477を発見し、現在検出している奈良時代遺構の下層に古い奈良時代の遺構があることがわかる。

5・1 I南地区、濠および下層遺構検出のため全面の排土を開始。I北地区、写真撮影。

5・7 I北地区、写真測量。I南地区、葺石検出。SD477を切りこんで建てる2間×3間の建物(SB471)を検出。

5・8 I南地区、後円部の葺石を破壊してつくる、軒平瓦を枠とする井戸(SE466)を検出。

5・9 I南地区、墳丘くびれ付近の南側で井戸(SE464)を検出。枠はなく、底にバラスを敷く。

5・10 I北地区、後円部にあたる発掘区東南部の土盛りが、墳丘の残骸であることがわかり、盛土および、辛じて残った円筒埴輪列を検出する。I南地区、発掘完了、写真撮影。

5・17 発掘調査完了。

6・20 H北地区、SB501の南側に東西に走行する溝があらわれる。

6・21 H北地区、SD499の南側に東西にならぶ4間分の柱列は、柱間が不揃であるが建物の可能性あり(のちに榭SB504になる)。暗褐色土は整地層であり、この面からの柱穴の検出は困難。

6・23 H北地区、東方では灰褐色砂質土の下層に土器片を含む褐色土層がある。この面から東西方に流れる溝が数条あらわれる。発掘区の中央に南北に流れる溝(SD485)がある。西方において、東西方の溝よりも新しい南北方向の溝を検出。それは数条あるが、いずれも近世の耕作に関連するもののようである。

6・24 H北地区、発掘区の南半部は窪地となり、柱穴などの遺構がなく、これにSD485が注ぐ状況を呈する。発掘区東限で試掘坑をいれ、底を探索。深いところまで粘土層が堆積し、古墳の濠である可能性が強い。

6・27 H南地区、北側から床土の除去をはじめ。東方では黄褐色礫混り硬質土、西方では暗褐色小礫混りの硬質土の土層を呈する。H北地区、再度、発掘区東南隅で試掘坑をいれる。現在遺構検出面としている灰褐色砂土が約50~70cmの厚さで堆積し、その下部に黒灰色粘土・灰黄色粘質土の層があることが判明する。下層には人頭大の河原石があり、古墳の濠である可能性が強い。F西地区、北辺から遺構検出を開始。このあたりの遺構面は削平されているらしく、床土直下の地山面で遺構が検出できる。東西にのびる柱列6間分(のちにSB530の南側柱となる)と4間分(のちにSB551の北側柱となる)が重なって検出される。重複関係からすれば、SB551の方が新しいことになる。

6・28 H北地区、発掘区東限の畦畔に添うトレンチを設定。厚さ20~30cmの灰褐色砂土の整地土層が全面に広がる。その下では中央部分で幅約6mの粗褐色砂質土(地山)を境に南北では整地層下に黒灰色粘土が堆積、底は灰色粘質土層である。中央の粗褐色砂質土の部分を平塚1号墳の外堤とするならば黒灰色粘土の部分は濠になる。南側の堆積部分の性格は不明(のちに平塚2号墳の北濠であることがわかる)。F西地区、発掘区の東限で井戸SE545を検出。内部からは須恵器片が少量でる。SB551の南側柱を検出。付近には土壌などが多く重なりあう。

6・30~7・7 H南地区、1次的な遺構検出が終る。G北地区、遺構検出開始。

7・9 G北地区、西寄りに南北に走行する河原石の葺石がある、西側に傾斜し、落石とともに埴輪が黒色土中から出現。西向の前方後円墳の前方部前縁か。その東側は黄褐色土と黄褐色バラス土からなる地山。発掘区の東寄りを南北に流れる溝(SD531)、これに接合する東西に流れる溝は近世の水田灌漑に関係するもの。

7・11 G北地区、発掘区南寄りに土塊状の遺構が数個ある。遺物は混入せず古墳築成時に窪地を埋立てたようである。葺石の前方部西南角には大型

第56次発掘調査 1969年6月2日~10月27日

6AFB-F・G・H地区

6・2 調査着手。H地区耕作土の排除。

6・18 H北地区、遺構検出開始。土層は床土下に灰褐色砂土、暗褐色土の順に堆積する。遺構は暗褐色土面で検出可能、発掘区北辺に接して柱穴がはじめる(SB501の南妻柱)。

の玉石を握える(のち園池 SG520 の石組みとなる)。G北地区における整地の大体を把握する。まず古墳築成に際し、自然地形を利用しながら一部に盛土をおこなう。つぎに黄褐色粘質土で表面を覆い玉石を葺く。奈良時代になって墳丘を削平し、褐色土あるいは灰褐色土(墳丘の盛土か)を用いて埋立てた濠のようである。F西地区、SB561の北側柱列を検出。

7・12 G北地区、葦石の検出。F西地区、南北を面する畦畔を越え、南に移動。小柱穴が多数ある。SB561の南側柱列を検出し、2間×3間東西棟建物であることがわかる。発掘区東限で南北にのびる溝(SD566)を検出、堆積からみて近世のものようである。

7・14 G北地区、葦石の露呈、写真撮影。H南地区、南側から北に向って遺構検出開始。発掘区のほぼ中央で、10尺等間の柱穴3間分を検出する(SB510の南側柱列)。F西地区、小柱穴無数を検出。遺構検出が終わり、写真撮影開始。

7・15 F西地区、写真撮影終了。

7・16 G北地区、14日に検出した柱穴付近を再度精査。この柱穴付近から西方は柱穴よりも新しい時期に整地がなされていることを確認。この整地面には遺構がなく、褐色の粘りのない土が西方に向って厚く堆積。SB510が2間×3間東西棟建物であることを確認。F西地区、遺構実測準備。

7・17 H南地区、発掘区の西寄り葦石の存在を確認。G北地区にある葦石の延長で、これ以西には奈良時代の整地土が堆積。発掘区の東方は、地山面。F西地区、遺構実測。

7・18 F東地区、遺構検出開始。発掘区西寄りに南北に流れる溝(SD570)がある。黄褐色パラス混り土の地山を掘込んだもの。溝中には灰色パラス混り粗砂が堆積、底には4条の溝が重なった状況をとどめる。この東側には東方で深くなる窪みがある。

7・21 H南地区、平塚2号墳の前方部前縁を検出。発掘北辺で東に折れるか。前方部は地山面まで削平されている。F東地区、SD570の精査。東方の窪みは南北に流れる溝。

7・23 H南地区、写真撮影。

7・24 H北地区、南辺から再度の遺構検出を開始。上層の黄褐色土を除くと東西にのびる葦石線が出現。葦石は北に向って下り、前方部の北斜面に相当する。濠の部分は上部から灰褐色砂土、黄褐色粘質土(砂混入)、黒灰色粘土が堆積する。F東地区、SD570の西岸付近は土壌によって擾乱されている。

7・25 H北地区、西方の灰褐色土と暗褐色土を除去。F東地区、SD570が北上する。

7・26 H北地区、発掘区の東南隅に広がる硬い褐色土の北側は深さを増しながら、灰色砂土に覆われた褐色土層に漸移する。発掘区の中央で、土層の状況を見る。ここでは褐色土の下に褐色粘質土層(床土)があり、その下部に奈良～平安時代の

遺物を包含する灰褐色砂層がある。この灰色砂層は第55次調査で検出したSD485の延長した流路とみられる。また、上層遺構面の整地層が約40cmの厚さで堆積し、その下部に遺構をとまらうもう一層の整地土層が存在することを確認した。平塚2号墳の北濠に相当する部分では暗灰色砂質土が厚く堆積し、小柱穴がある。柱穴はまとまらないが、1柱穴から蛇目高台の縁軸陶片が出土し、平安時代の遺構であることがわかる。

7・31 H北地区、現在までに検出した遺構を上層遺構として、写真撮影をおこなう。

8・1 F東地区、遺構検出。床土下に直に黄色砂混り土の地山があらわれ、顕著な遺構なし。

8・2 H北地区、実測準備。G北地区、発掘区東南隅に敷かれたような状態で玉石を検出。整地の際、葦石を濠に棄たしたものか。南辺東寄り葦石の原位置を確認、この付近では幅50～60cm程残存、葦石最下段の石列と濠底の地山との比高は約20cmである。E東地区、南北に流れる溝があるが時期は新しい。

8・4 G北地区、発掘区の南側で葦石の検出につとめる。西寄りの南北方向の葦石を北に向って露呈する。G東地区、遺構検出終了。撮影準備。

8・5 G北地区、発掘区の西南にある立石は、周囲の玉石と関係しながら園池を構成する可能性がでてきた(SG520)。

8・6 G北地区、平塚2号墳前方部前縁葦石は落石状態で露出する。SG520を精査、池の存在を示す泥土の堆積はない。発掘区南辺の玉石の多くは落石につき、除去して地山面(濠の底)まで下げる。発掘区の東南隅に、方形の坑を掘り底に玉石を敷く井戸SE535がある。

8・8 H南地区、葦石の検出をはじめる。G北地区、撮影準備。

8・11 H南地区、葦石を露呈する。南・北部分は比較的よく残るが、中央部分は欠落。南濠の土層は、下から灰黒色砂質土(地山か)、灰黒色粘質土(濠の堆積土)、褐色土(奈良時代整地土)の順で堆積する。F東地区、遺構実測。

8・13 H西地区、遺構検出開始。F東地区、実測終了。H北地区、北辺から上層遺構を除き、中層遺構の検出に着手。

8・18 G北地区、SG520付近の現状実測。その後落石を除去する。H西地区、平塚2号墳の西濠の整地層を排土。いくつかの小穴があるがまとまらず、この地区を南北に流れる溝(SD527)には灰褐色土層が堆積し、他の遺構よりも古い。

8・19 H北地区、西北隅で柱穴を検出。SB482の東側柱、SB504の南側柱が出はじめる。SB481の南妻柱を検出するが、この付近は木炭の細片を混える灰色砂質土が堆積する窪みとなる。H西地区、撮影準備。G北地区、葦石の落石除去。濠中の葦石は現在露出した面が玉石堆積の下面で、その下に玉石を混えない厚さ10～20cmの黒色粘質土の堆積があり、埴輪片が混入している。

8・20 H北地区、SB481の西側柱を2穴検出。この付近は黄褐色土の地山とかがえられるが、その南側は、赤地層らしいやや汚れたある褐色土が堆積する。発掘区の中央で、SD485の層序を調べる。最上層の第1層は褐色土と黒褐色土の混合層で遺物を含む。第2層は黄色細砂の薄い層、第3層は有機質を含む黒色粘質土となる。H西地区、写真撮影。G北地区、基石の検出すべて終了する。

8・21 H北地区、SD485が東西に分流して南方に流れていることがわかる。発掘区中央での南北を横断する黄褐色の土層は地山とおもわれ、平塚1号墳と2号墳が共有する外堀か。

8・22 H北地区、SD485の西流はほぼ末端部であるが、東流はさらに南下する模様。外堀部分には、暗褐色砂質が詰る不規則の小穴が多数ある。

8・25 H北地区、発掘区の西南辺に土蔵があるが性格不明。

8・28 H北地区、SD485を掘り下げる。堆積土は5層にわかれ、第4層の一部まで下げる。第2層の黒色粘質土が堆積する時期には、付近一帯が水溜の状況にあったことが推測できる。発掘区西南辺で東西にならぶ2柱穴を検出(のちにSD490となる)。

8・27 H北地区、SD485は都合7層に分層でき、このことを確認。西流は西に曲折するか。発掘区西南部分で昨日検出した柱穴にともなう柱穴を検出し3間以上×2間東西棟建物(SB490)であることが推測できる。H西地区、実測終了。SD527を掘り下げ、堆積土が4層にわかれることを確認。

8・28 H北地区、SD485の発掘。西流の第3層では両岸に柱を打込む。SB490がさらに東に延びる。H西地区、SD527の発掘。昨日第4層とした砂層は整地土の下に溜入するので再度精査。結局、第1層の灰褐色のみが堆積するきわめて浅い溝であることが判明する。第2層以下は常に不整形に流入する別の流路のようである。

8・29 H北地区、SD485の発掘。第4、5層の排土、坑列は第5層が堆積した後には打込まれていない。第6、5層の時期には、東西の2流が共存するが、それ以降第4、3層の時期には西流のみとなり、第2層の時期の氾濫によって2流を含む部分の水溜りになっている。第5層から木簡、木器などが土器に混って多く出土。SB490の北側でSB480の身倉と南側の柱穴を検出。それらの遺構は暗褐色の整地土を除去した後にはあらわれる。なお、SB480身倉南側柱の南側にあらわれる土層変換線は外堀と濠との境を示しているようである。

9・2 H北地区、SB490以東の濠部分を下げ、褐色の整地層を除くと、黒色粘土、灰色粘土、灰白色砂土が入り混る土層を呈し、北方に向って浅くなる。H西地区、古墳の外堀線をしるため、発掘区の南辺を西に拡張。

9・3 H北地区、SD485東流の堆積土のうち灰色粘土を除く、遺物多し。下層の黒茶色土は外堀

付近でなくなる。SD485に接する濠部分は氾濫の状況を示し、木質遺物や土器が多い。SB480の桁行が1間東にのび、桁行4間以上、梁行4間であることを確認。

9・5 G北地区、SG520の範囲を探るため、西方に発掘区を拡張。

9・6 H北地区、SD485は濠の部分で再び1本になり南流することがわかる。兩岸の杭が多い。

9・10 G北地区、拡張部分で大型の河原石が10個ならんでいるのを確認。石はいずれも地山に据えつけている。その西側に南北にのびる溝SD548がある。

9・12 H北地区、SD485の発掘。前方面西北側の基石を検出。この付近でSD485は流路を西に寄せている。

9・17 H北地区、発掘終了。写真撮影。

9・19 H北地区、遺構実測開始。

10・27 H北地区実測および補足調査終了。

11・8 全滅の埋もどし開始。

第56次補足調査 1969年11月12日～12月

6A F B-G南地区

11・12 表土の排土開始。

11・22 床土下の褐色バラス土を除いて、西辺から遺構検出を開始。

11・29 南辺で東西にならぶ2柱穴を検出。北側には、北東から西南に流れる溝がある。

12・1 南辺の柱穴は、E地区の北辺で検出した柱列と組合わされて東西棟建物になる模様。

12・2 東辺から遺構検出。南方に小柱穴多し。

12・3 南辺の柱列は、結局6間×2間東西棟建物であることがわかる(SB530)。その東側に重なる、3間×2間南北棟建物(SB550)がある。重複関係からSB550の方が古い。なお、SB530の北側柱には東から2間分のみ南がつく。発掘区の南辺中央部分に方形の堀形があり、西壁に添う底部を玉石で敷詰めている。平塚2号墳にともなう基石か。

12・4 南辺の堀形は奈良時代の井戸SE525であることが判明。発掘終了。写真撮影。

12・5 実測

12・9 SE525完測。

12・11 埋もどし開始。

第57次発掘調査 1969年7月9日～12月17日

6A F B-A・B・C・D・E地区

7・17 E地区、床土剥除をおこない遺構検出開始。発掘区東辺で、三坊大路東側溝に推定できる幅2.4m前後の土層の異なる部分を発見。堆積土は上層が黒褐色粘質土であり、下層が灰褐色砂質土である。

7・19 E地区、西辺の床土下の地山面から遺構検出。土壌、溝などがあるが遺物はとくになし。

7・22 E地区、新しい時期の土壌・溝などを検出。南辺の土壌の北岸には木の根が埋る。

7・24 E地区、発掘区西寄りでは南北に走行する幅30cmの溝がある。一部を掘り下げ中世の土釜片をえる。結局、東三坊大路(SX600)の路面敷の部分の遺構(土壌、溝など)には古代にまで遡るものがないことを確認。

7・28 E地区、東側溝(SD650)の発掘開始。溝の堆積は、上面に灰褐色砂質土が広がり、その下は黒色粘質土(Ⅱ黒)、灰白色砂質土(Ⅰ砂)の順に堆積しているようである。遺物多し。

7・29 E地区、SD650の発掘、Ⅰ砂の下にまた黒色砂質土(Ⅱ黒)が堆積することが判明。D地区、小路との交差点に推測されるD地区の一部をまず掘る。大路の路面はE地区と同様に新しい時期の溝が南北に流れる。SD650はこの地区でも存在する。土層の堆積は基本的にはE地区と変わらない。

7・30 E地区、発掘終了。D地区、SD650は西側に灰色砂が堆積する溝(部分的に東側を石で護岸)と黒色粘土が堆積する古い溝とが重なっていることを知る。なお、西溝の石列の下には杭列があり、やはり護岸用とかんがえられる。

8・1 作業工程の方針を決定。今後はSD850を追跡して南一条大路まで下ることとする。発掘範囲としては、路面をさけてSD650の部分に限ることとする。D地区、寛平大室が60点まとまって出土した。

8・5 E・D地区、写真撮影。

8・7 E・D地区をSD650の幅のみのトレンチとし、南北に連絡。D東地区、遺構検出開始。遺構は床土直下の地山面から検出。発掘区東寄りに南北にならぶ4間分の柱穴があり、その西側に南北に流れる溝(SD611)がある。なおSD611には東岸に杭が打込まれている。

8・12 C東地区、SD611が南下するが、この地区で西方に分流することが判明。

8・13 C東地区、発掘区東辺で南北にのびる柱穴(SA620)を検出。ただ中間の3間分の柱穴が小さい。

8・18 E地区、SD650の検出終る。遺物多数。

8・12 D区、北半分の遺構検出終る。

8・25 D地区、南半分地発掘開始。

8・27 D地区、天長5年4月の告知札出土。

8・29 C地区、発掘着手。

9・1 C地区、この発掘区で、SD650が、3期に分れることがわかる。第1期は灰褐色砂(Ⅰ砂)、灰褐色凝礫土(Ⅱ砂)が堆積する時期で、貞観通宝の時期。第2期は溝が西側へ堆積する時期で、寛平通宝の時期。第3期は1・2期に両溝にわたって重なる黒色粘質土の堆積する時期である。

9・13 C地区、南寄りでSD650の東岸に東から

注ぐ溝(SD635)を検出。この付近から南方のSD650の黒色粘土堆積には灰色粘土が混じる。

9・18 C地区、発掘完了。

9・19 B地区、遺構検出開始。

9・20 B地区、上下に重なっていた3期間のSD650が、流路を変える現象がみられる。すなわち、SD650Aは依然として同位置で南下するが、SD650B・Cは流路を西にそらす。

9・25 A地区、遺構検出開始、発掘区東方では中世以降の小溝などを検出するが、古代の遺構はみあたらない。SD650の南延長部分では、溝の痕跡を示す程度になる。

9・29 A地区、発掘区北辺で、SD650の東側に想定する築地を探索してきたが、結局残存していないことが判明。B地区、発掘終了。

10・2 A地区、この地区一帯はSD650が氾濫し、粘土の地山に、砂、粘土が互層になって堆積する状況が広い範囲にみられる。

10・15 A地区、発掘区南辺で推定南一条大路北側溝位置を探索した。だが、灰緑色の地山がなだらかな起伏を呈するのみで明瞭な溝の遺構確認はできない。

10・18 A地区、発掘終了。写真撮影。

11・7 A・B地区、実測終了。

11・18 全域にわたる補足調査開始。土層観察用の畦をこわし、遺物を採集する。

11・25 補足調査終了。写真撮影。

第60次発掘調査

1969年10月22日～1970年1月13日

4PUN-K・L・M地区

10・22～29 発掘準備、草刈り。現状地形実測。

10・3 K地区、土盛りを中心にK₁、K₂、K₃、K₄のトレンチを設定。盛土はバラス混り黄褐色粘質土で層の細別不能。K₄トレンチに東西にのびる溝がかかる。須恵器、瓦、磁器などが埋まり古墳とは関係ない。

11・4 M地区、M₁トレンチを設定。表土下はバラス混り黄褐色土層となる。盛土には瓦片、土師器片などをふくみ、古墳の盛土とはかんがえられない。

11・5 M地区、M₂トレンチを設定、盛土には遺物なし。

11・6 K地区、K₁トレンチでは黄褐色砂質土の地山まで下げ、西方で溝状の遺構を検出するが、古墳とは無関係。現状のトレンチでは外堤斜面の状況はつかめない。K₃トレンチでは、表土下1.7m付近に灰褐色砂質土の整地土層があり、瓦、埴輪などを包含する。K₂トレンチで、現在の耕作土の下に古い耕作土と床土の土層があり、その下層で原位置とかんがえられる埴輪円筒および東側で南北にのびる溝(SD734)を発見。

11・7 K地区、K₂トレンチの埴輪は南北にな

らび、古墳外堤にともなうものである(SX740)。SD734はおおよそ3層にわかれるが、最下層から奈良、平安時代の土器を検出し、時期がわかる。トレンチの東辺では、西側が低い段をなす。

11・13 K地区、K₂トレンチを南方に拡張し、K₅トレンチとする。

11・15 M地区、現在までにM₁～M₄のトレンチを発掘するが、すべてのトレンチにおいて盛土下で旧耕作土面を検出し、若干の近世遺物を混えている。結局、盛土は近代になされたことになり、墳丘でないことがわかる。

11・18 K地区、SD734は発掘区を南北に縦断し、南方で氾濫している。埴輪列SX735は発掘区の中央以南では削平されている。SD734の東約12mをへだてて存在する段落は、ウツナベ古墳の外濠とみられる(SD732)。水が流れた痕跡をとどめるが、奈良時代になって整地がおこなわれ、のちにSD734が掘込まれたようである。

11・21 K地区、遺構検出終了。

11・24 K地区、写真撮影、実測開始。M地区、写真撮影。

11・28 K地区、補足調査。M地区、発掘完了。

12・2 K地区、発掘完了。

12・9 L地区、遺構検出開始。L₁トレンチの全長にわたって埴輪列がある。K地区のSX735と

同一線上にある。

12・11 L地区、発掘区の西辺で、奈良時代以降とおもわれる南北に流れる溝を検出(SD746)。埋土は灰褐色粘質土、瓦、埴輪の破片が少量混入する。SX735の東側でSD734を検出。SX735の南方部分の埴輪は保存状態がよくないが、北方においては比較的良好。

12・13 L地区、発掘区北方の外濠SD732の所々に窪みがある。しかしSD732が貯水したことを示す材料はない。埴輪列の清掃。

12・14 L地区、埴輪片の散布状況で写真撮影。

12・16 L地区、埴輪片を整理して写真撮影。実測開始。

12・18 L地区、埴輪掘えつけの掘形を掘る。幅50cm前後、深さは現状の地山から10～20cm。

12・22 L地区、埴輪は最下段以下を地中に埋めてたてたようである。

12・23 L地区、L₁トレンチ発掘完了。

1・10 L地区、L₁トレンチに南接してL₂トレンチを設定。埴輪列のみを確認することとする。昨年にひきつづき一直線上に埴輪がならぶことを確認する。

1・12 L地区、写真撮影。実測開始。

1・14 L地区、発掘完了。



fig. 4 移設した奈良時代の庭園